抱樸館を支える会
会報 55号
2022年 10月 1 日 発行:抱樸館を支える会

誰もが明るい日が射す方に向かって進めるように

～事業所名を『あした』にした想い

社会福祉法人グリーンコープには、罪を償いその後の生活を支援する自立準備ホーム、その中で障がいがある方が利用する障がい者グループホーム、就労継続支援Ｂ型事業所の３つの事業所が熊本にあります。この３つの事業所が２０２２年１０月より自立準備ホームあした、障がい者グループホームあした、就労継続支援Ｂ型事業所あしたと名称が新しくなって生まれ変わります。事業所名を決めるにあたっての検討の様子など、グリーンコープ生協くまもとの小林香織理事長にお話しを聞きました。

――名称が「あした」に決まった経緯を教えて下さい。

「私は、このような施設が熊本にあることをとても誇らしく思っています。理事長になる前、福祉委員長をしていて、熊本にこのような施設があることをみんなに知ってもらいたいと思い、理事会でも報告をしていましたが、組合員との距離は少し遠く感じていました。今回、組合員が名前を考える場を設けることができて、自分たちに引き寄せて考えることができたと思います。名称の検討は、総勢５４名で行い、１１案が出ました。その中で、意味、想いなどから『あした』と名称が決まりました。漢字で書くと明るい日、誰もが明るい日が射す方に向かって進み、元気な朝が来るようにと願いを込めて、この名称にしました。入所者のなかには、明日がくることに気が重くなっている方がいるかもしれません。でも、明るい日に向かって、一緒になって歩いていけるような施設になることを願っています」

小林香織理事長

――自立準備ホームを、組合員という目線で、どのように感じられましたか。

「初めて聞いたときは、自分の身近にそのような方がいないので、ドラマの話を聞いている気持ちでした。でも、繰り返しその話を聞くことで、私は身近に感じるようになりました。もしかしたら、私自身もそのようになる可能性だってあるし、誰もが意図しなくても、人を傷つけることもあるので、人ごとではないと捉えるようになりました。もっと、私たちの生活に近いものとして、一緒の地域に住む仲間、地域の一員として関わっていけるようになりたいと思います」

――組合員との関わりについての今後の予定はありますか。

「まず、今までほとんど関りがなかったので、出会いの場を作ることができるといいなと思っています。組合員が出会い、何を感じてもらえるかが大切だと思います。もしかしたら、職員として働きたいという方も出てくるかもしれません。いつかは、地区の取り組みなどにも来てもらうなどし、一緒に稲刈りをしたり、そのあと食事をしたりしながら、関わりを持てたらいいなと思っています。そして、グリーンコープの福祉の理念に基づいた事業所になっていくことを私は期待しています」

――ありがとうございました。

３事業所の統括責任者として新しく赴任した髙山郁生さんと、事業所で働くスタッフにもお話を聞いてきました。

――自立準備ホームのことを教えて下さい。

髙山「保護観察所からの委託を受け、罪を償った後、帰るところのない人を支援する住居施設です。刑務所から出たとしても、帰るところ、住むところも、お金も、何もない状況に陥る方も少なくありません。その様な状況だと、再犯につながりやすくなります。その様な方々を対象に、自立準備ホームに入居し、支援を行います。ここには、最長６ヶ月しか住むことができません。その間に、就職先を見つけ、自立に向けての資金を貯め、単身生活に向け頑張っていきます」

髙山郁生さん

――就職先はすぐに見つかりますか。

髙山「協力雇用主と言って、犯罪・非行の前歴のために、定職に就くことが容易でない刑余者を、その事情を理解した上で雇用し、協力する民間の事業主がいますので、現在は協力雇用主を中心に求職活動をしています。今後は仕事を継続していけるような支援に取り組みたいと思います」

――障がい者グループホーム、就労継続支援Ｂ型事業所のことを教えて下さい。

髙山「実際、刑余者の中には、出所してから知的障がい、精神障がいなどの障がいを抱えていることが分かることもあります。障がいを持っている方にきちんと支援ができるように、障がい者グループホームや就労継続支援Ｂ型事業所を併設しています。障がい者グループホームへ入所している方々は、一般の就労が難しい方もいます。その様な方を対象にして、日中活動の場として、就労継続支援Ｂ型事業所で作業を行うようにしています」

刑務官をしていた、職員の小﨑さんと井上さんにお話を伺いました。

――刑務官の仕事をしていた当時、障がいを持っている方も少なくなかったとか。

井上「感覚的なものですが、受刑者の中には障がいを持っているのではないかと感じる方はいました。後は、成育歴が悪かった方が多かったですね。両親がいない、ネグレクトや暴力、いじめを受けてきたなど様々です」

――支援を行うなかで大切なことは。

井上「障がいなどもありますが、その障がいを個性と捉えて、接していくようにしています。あとは、心の居場所をつくることが大切だと思います。心の居場所がないと、非行や再犯に繋がります。私はこの施設を明るく、楽しく、毎日でもここに来たいと思えるような場所にしたいと思って仕事をしています」

井上湖三郎さん（左）
小﨑孝さん（右）

小﨑「刑務所を出所後、行く当てもなく、再犯する方は少なくありません。普通に考えて、犯罪をする場面になると恐怖心や自制心から、犯罪の手前で踏みとどまることができると思います。なので、私は現役の時に再犯をしない人ではなく、再犯ができない人になりなさいと伝えていました。また、出所後の方を救うためには、ここが絶対に必要な施設と思います。そして、ここが心の居場所となれるようにしたいと思います。そのために、決して上からの目線で見ないよう、対等に接するようにしています。そして、再犯ができなくなるような環境をつくることが大切だと思います」

髙山「入居者本人の気持ちを大切にして関わるようにしています。私たちは、利用者に同じ過ちを繰り返してほしくありません。だからこそ、今後、自立に向けて進むなかで、利用者としっかりと話をして、今後どうしていきたいかを一緒になって見つけていけるようにしています」

――今後やりたいことなどありますか。

髙山「ここに入居している間は支援ができますが、退去した後は支援ができません。退居された後でも、支援ができるように、退居者とのつながりを持ち続けることができるようにアフターフォローに取り組み退居後も困ったときには相談できる環境をつくっていけるようにしたいと思っています」

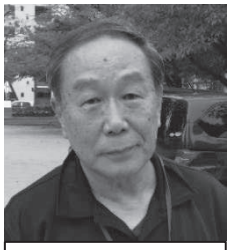
――ありがとうございました。

炊き出しのお弁当が支援の入り口となって

～NPO 法人久留米越冬の会の支援～

ＮＰＯ法人ホームレス支援久留米越冬の会は、１９９２年に発足（当時は久留米越冬活動の会）以降、久留米市を中心に生活困窮者の支援などを行っています。今回、炊き出しや夜回りの様子などを代表理事の畠中茂生さんに話を聞いてきました。

――コロナが流行して以降、支援の回数を増やされたとか。


畠中茂生代表理事

「コロナが流行し始めた頃、感染拡大防止の観点から、炊き出しを途中ストップしたりもしましたが、スタッフの中から『このような時だからこそ困っている人がいる』と意見を受け、以降、月に１回の炊き出しに加え、毎週パトロール活動をするようにしました。炊き出しは公園で行い、コロナのことが懸念されるので、あえて食材を配布するだけに制限をしています。私たちは炊き出しを『命をつなぐ活動』と『出会いの場』と思っています。炊き出しには、顔見知りの方も来られ、生活に変わりが無いかなど様子を伺います。その他に、新しく出会う方も少なくなく、月に１０人ほど出会うこともあります。すぐには支援につながらなくても、少しずつ関係性をつくり、支援につながるようにしています」

――炊き出しにはどれぐらいの人数があつまりますか。

「日によって異なりますが、３０人から４０人ぐらいです。実は、炊き出しに来られる方は、ホームレスの方だけではありません。家はあるものの、生活に困窮している方もたくさんいます。年代もばらばらですが、年金だけで生活している６０代以上の方もなかにはおられます」

――支援をしている方は何人ぐらいですか。

「見守り支援を含めて６０～７０名ほどいます。そのなかには、長期で路上生活をしている方もいます。夜回りをするなかで、支援物資を渡し、体調に変わりがないか確認し、他愛もない話をしながらも、近況報告をしてくれます。人と人との関りはとても大切だと改めて感じます」

――支援をする中で大切なことは。

「私は支援をするなかで、大変とは思ったことはありますが、苦労とは思ったことはありません。極論、好きなことをするのと同じ感覚です。支援をするなかで、夜中の１２時ぐらいに『眠れないから』と相談者から電話がかかってくることがありました。電話で２時間ぐらい話をしていると『眠たくなったから眠れそう』と言って電話を終えました。仮に、電話に出なかった場合、どうしたんだろうとモヤモヤした気持ちで過ごさないといけないですし、何かがあってからでは遅いと思います。後でこうしとけばよかったと後悔はしたくはないので、やれることはしていきたいと思っています」

「私は一時期、金銭的に相当に苦労した時期がありました。自宅にあるお米が減っていく怖さや、食べるものに困って、レンゲを摘み、食べたこともありました。その経験があるからこそ、生活困窮者にとって、今何が必要で、どのような支援が必要か分かります。私は『すべての答えは現場にある』と思って、現場での活動を大切にしています。現場で様々な課題と直面しながらも、解決に向けての支援を行っていくようにしています」

――今後やってみたいことを教えて下さい。

「今はＮＰＯ法人ですが、法人格を認定ＮＰＯ法人にし、より足元を固めて活動を継続させていきたいです。他には、無料定額宿泊所や日常生活支援住居施設を開設し、先々でその事業に付随する新しいサービスがつくれると良いなと思っています。また、新しく事業を展開するなかでも、今までの支援をしてきた人の想いを継承しつつ活動を行っていきたいと思っています」

――ありがとうございました。

広島県呉市の天応地域をママ友と一緒に支え続けて

～つなごう@天応を取材しました～

広島県呉市天応地区の地域住民のメンバーでつくられた任意団体「つなごう@天応」は、グリーンコープひろしまがフードサポートを通して支援を行っています。地域食堂や子どもの居場所のほかに様々な活動をされています。今回、活動の様子について、代表の井上聡美さんを取材しました。

――団体が立ち上がるきっかけを教えて下さい。

「私は呉市の天応地区の出身です。２０１８年の西日本豪雨災害が起きた当時、天応地区では１２人の方が亡くなり、そのなかには地元の同級生も２人いました。息子同士も同級生で、とても仲がよい関係でした。私自身、気持ちが落ち込んでいましたが、『このままではいけない』『被災地で何かできることがないか』と考えて、ボランティア活動を始めました。当時、同級生たちと一緒に避難所で活動を行うなか『ここには支援の手が届いているけれど、あそこには手が届いていない』『もう少しこんな風にできたらいいのに』という気づきがあり、２０１９年１月に任意団体として『つなごう@天応』を立ち上げました。自分が育った地域、また、子どもたちが育っていく地域でもあるので、地域の元気を取り戻したいと考えて、むかし以上とまではいかないにしても、今の元気をキープしたいと思っています。そんな気持ちが原動力としてあります」

井上聡美さん（左下）と
つなごう@天応メンバー

――いろいろな活動をされているとか。

「西日本豪雨災害以降、子どもたちの居場所をつくろうと思って始めたのがきっかけで、安全な子どもの居場所兼子どもの社交場として『駄菓子屋ＥＮ』というイベントも行っています。子どもたちは、お小遣いを握りしめてやってきますが、買いすぎたときは『もう１回計算をしてみてごらん』と声かけし、お金の勉強もできていると思います」

「そして７月からここで地域の食堂兼子どもの居場所としてのイベントも開催するようになりました。地域の子どもたちや、高齢者の方々も来てくれて、みんなの交流の場にもなっています」

――職場体験の受け入れもしているとか。

「小・中学校の授業に地域の活動団体として、入ることがあります。その授業は子どもたちがやってみたいことを体験する授業で、例えばですが、炊き出し体験をやってみたいと意見があったときは、私たちがそのイベントをするためには何が必要かと一緒になって考えながら進めていきます。私たちは、地域の交流や活性化のために活動をしている団体としても活動をしています」

――嬉しかったことは。

「小学校に行くと、自分が人気者なんじゃないかと勘違いするぐらい子どもたちが『駄菓子屋のおばちゃーん』と手を振ってくれます。子どもたちの元気な声や、笑っている声を聞くだけで、私も気分が上がります。子どもたちの元気な姿を見るその時が一番嬉しいです」

――活動をするなかで大切にしていることを教えて下さい。

「メンバー全員が私のママ友で、全てボランティアで行っています。この活動ができるのは、一緒にやってくれる仲間がいるからです。みんなとはとても仲が良いのですが、そんな仲間を大切にすることが一番だと思います」

――今後やりたいことなどを教えて下さい。

「地域の『なんでも屋』をやりたいと考えています。高齢の１人暮らしの方は、電球を替えることでも困難な方がいます。そんなちょっとした困りごとを私に相談されることがありますが、私を知らない人は、そのような頼み事をできる人がいません。その様な方にも手助けができるようになれると良いなと思っています」

――ありがとうございました。

食を通じた若者の非行から立ち直るきっかけづくり

～ばっちゃんと慕われる中本さんの若者支援～

広島市中区で４３年前から青少年への居場所づくりをしている中本忠子（ちかこ）さんに話を聞きました。中本さんは昭和９年生まれの８８歳で「ばっちゃん」の愛称で慕われて、これまで３００人を超える若者への支援を行ってきました。

――保護司をされていたとか。

「昭和５５年に学校のＰＴＡ役員をやっていました。校区内の警察が私の職場から近く、生徒が警察に補導されると、学校から私の職場へ連絡があり、生徒を引き取りに行くことがありました。親に連絡しても繋がらないこともあり、そのまま職場で見ることもありました。そんなことをしている内に、警察の方に保護司になることを勧められて保護司をすることになりました」

中本忠子さん（中央）

――この活動を始めた経過を教えてください。

「再犯を止めさせたいという思いで活動をするなか、再犯をするのは、お腹がすくから万引きをしたり、空腹を紛らわすためにシンナーを吸っているということを知りました。それなら『お腹いっぱいご飯を食べさせたら、万引きもシンナーも止めることができる』と考え、私の自宅でご飯を食べさせるようにしました。そうすると、自然と万引きもシンナーも無くなってきました。すると今度は、自分が担当している子どもだけでなく、その友達も集まってきました。たくさんの子どもたちが来るので、食費がものすごくかかりましが、自分の貯金を切り崩したり、亡くなった親から受け継いだお金を使ったりしながら、数十年なんとかやりくりしていました。途中からは補助金をもらうなどしていましたが、それでも手出しがほとんどで本当に大変でした。今はグリーンコープさんからも食糧支援をしていただき、本当に助かっています」

――現在の様子を教えてください

「毎日、４０～５０食を準備しています。いまは新型コロナの影響で弁当を渡す形になっていますが、以前はここで食事をしていました。スタッフはみんなボランティアで集まった方で、常時６人＋αで食事などの準備をしています。ここに来る若者は、家庭の味に飢えているのか、みそ汁が一番好きと言います。また、当時支援していた若者で今は県外で結婚して子どももいる良い青年になっていますが、まるでここが実家のように家族で遊びに来てくれます」

――若者の再チャレンジの場としても。

「一度、非行に走っても再チャレンジする若者はたくさんいます。それには周りの環境も大切です。地元にいることで、周りにレッテルを貼られたり、交友関係が変わらずに再び非行に走ってしまう若者も少なくありません。ですので、保護観察所や様々な団体とも協力しながら県を超えて、新しい土地で再チャレンジできるような支援も行っています」

――学習支援もされているんですね。

「十数年前、まだ個人で活動を行っているなかで、子どもたちが増えて、自宅では食べるスペースが手狭になっていました。当時、小学校の先生方が協力してくれて、学校の空いている教室を利用して良いとのことで、小学校の教室を借りて、自宅で作ったご飯を持っていき、食事を食べさせていました。食事の後、授業がなく時間がある先生が協力してくれて、宿題や勉強などを教えてくれていたのが始まりです。それから学習支援を行うようになって、この場所に移ってからも続けています。ここでは、自宅で勉強しているような環境も大切と考え、２階の勉強部屋に１階の台所で食事を作っている音が聞こえるよう工夫しました。食事ができたら「ご飯できたよー」と声をかけて下で食事を摂ってもらっています」

――ありがとうございました。

地域の人とのつながりや触れあいが生きがいです

～抱樸館卒業生の城戸勝幸さんを取材しました～

抱樸館福岡に２０１１年に入居され、現在は地域で生活されている城戸勝幸さんは、昭和２６年生まれの７１歳です。

城戸さんは、抱樸館福岡にいるときからとても絵が上手く、職員や他の入居者によく披露していました。抱樸館福岡を退居された後は、城戸さんの得意だったことを活かして、アクセサリーなどの作成、販売を始めました。今では住んでいる地域を中心に、色々なところで開催されるイベントに参加し、作品の展示・販売をしています。今回、年齢を感じさせないほど精力的に活動している城戸さんに話をお聞きしました。

――抱樸館に入ったきっかけは。

城戸勝幸さん

「当時お金に困ってしまい、数ヵ月ほど公園で生活をしていました。その生活をしているときに、抱樸館の職員と司法書士さんに声をかけてもらって、抱樸館福岡に入居することになりました」

――抱樸館福岡での生活はいかがでした。

「すべて良かったです。抱樸館に入居したことで、生活を立て直すことができました。公園で生活しているときに、声をかけてもらったことは、本当に感謝しています。公園での生活は大変だったので、抱樸館に入居した時、雨がしのげて、寝るところがあり、食事もいただけて、相談にも乗っていただいて、本当にありがたかったことを思い出します」

――退居後も抱樸館福岡とつながりがあるんですね。

「コロナが流行る前は、時折、連絡をしていました。抱樸館で開催される、カフェやお祭りなどのイベントに参加していましたが、コロナの流行とともに、入館制限がかかり、イベントが中止となってから、行く機会が減りました。ただ、抱樸館を通して友人になった方とは、今でもつながりがあります」

――アクセサリーなどの販売はいつからスタートしたのですか。

「アクセサリーは、２０１９年ぐらいから始めたので、今年で３年ほどになります。元々、絵を描くことが大好きでよく絵を描いていました。実は、昔、個展を開いたこともありました。それから、絵を描くだけではなく、手作りのアクセサリーなども作るようになりました。全てが独学で、インターネットで調べながら勉強しました。１個つくるのに３～４時間ほどかかります。部品もとても小さいので、拡大鏡を片手に、ピンセットを使いながら、心を込めて作っています。今は、このアクセサリー作りがとても楽しくて、生きがいになっています」

「販売のきっかけをくれたのは、美野島に顔なじみの青果店があり、そこの社長からイベントを紹介してもらったのがきっかけでした。美野島では『ミノシマルシェ』というイベントが月に１回ほど開催され、そこで露店を出して作品を販売しています」

――展示・販売活動をするなかで、嬉しかったことは。

「売れることはもちろんですが、お客さんとの触れあいが何より楽しいです。お客さんの年齢層も幅広く、若い方から、高齢の方まで、様々です。私が住んでいる地域が美野島で、地元のイベントに参加することで、地域の知人や友人が増えました。つながりが増えたことも嬉しいです。他にも、私の作品を楽しみに待っている、常連客もいるんですよ」

当時の城戸さんを知る抱樸館の職員の方から一言メッセージをもらいました。

「当時、絵がとてもお上手だったこと、服装がとてもおしゃれで、若々しかったことを覚えています。これからも、自分の得意分野を活かしながら、地域でたくさんのつながりをつくって、楽しい生活を送ってほしいです」

――ありがとうございました。

子どもから高齢者までみんなが集う居場所となるように・・・

～みんなのいばしょ上官げんきもりもりハウスを取材しました～

２０２１年１０月にオープンした『みんなのいばしょ上官げんきもりもりハウス』は、グリーンコープ上官店の２階にあります。ここは、社会福祉法人グリーンコープ子育てポートセンター愛・あいのスタッフが中心となって運営をしています。今回、スタッフのみなさんに居場所の様子を取材してきました。

――子育てサポートセンター愛・あいのことを教えて下さい。

「私たちは『子どもが大好き、子育ての経験を活かして社会貢献をしたい、子育て支援を通して自分自身を活かしたい』という思いで集まったワーカーです。愛・あいには総勢１４名のスタッフがいて、全員がローテーションで子どもの居場所に関わりを持って運営をしています」

小泉悦子さん（右）
野口富士子さん（中）
松本由起子さん（左）

――子どもの居場所の開催頻度は。

「グリーンコープ上官店の２階で毎週２回、水曜日の１５：３０から１８：３０と土曜日の１１:００から１５:００に開催しています。参加者はおおよそ１０人前後ぐらいですが、参加人数は１１ヵ月で延べ４００名を超えました。１０月２２日（土）には、１周年記念イベントを開催予定で、是非たくさんの方に参加いただきたいと思っています」

――参加対象は。

「子どもから高齢者の方まで、どなたでも参加できるようにしているので、年齢など関係なく、たくさんの方々に来てほしいと思っています。今は小学生が中心に来るほか、未就学児が親御さんと一緒に来られることが多いです」

――食事の提供もしているとか。

「グリーンコープ上官店で作ったお弁当を子どもは無料、大人２００円で利用ができます。コロナの影響もあり、今はお弁当の配布のみですが、ここには調理スペースがあるので、先々は、みんなで一緒に作りたいです」

――子どもたちは何をして過ごしていますか。

「基本的に子どもたちは自由に、好きなことをして過ごします。学校の宿題をしたり、友達と遊んだり、本を読んだりと様々です。今日は、ペットボトルを使った工作をしていますが､みんな楽しんで参加をしてくれています」

――子どもたちとの関りで大切にしていることを教えて下さい。

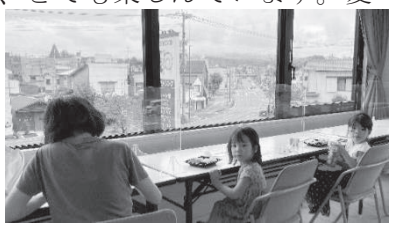
「子どもたちへの声かけをする時は『駄目』と言わないようにしています。もちろん、危険がある時はその限りではありませんが、子どもたちが自分で考えて､行動ができるように、『どうしたらいいかな』と聞くようにしています。そうすることで、子どもたちがきちんと自分で考えて動いてくれるようになります」

――今後やってみたいことはありますか。

「ご飯やお菓子作り、楽器の演奏をしたり、歌ったり、踊ったり、子どもたちと一緒になってできることをしたいと思います。また、ここに来てくれている子どもたちが、大人になって、結婚して子どもを連れて遊びに来てくれる様な関係をつくっていきたいと思います」

――３人のお子さんと一緒に遊びに来ていたお母さんに感想をお聞きしました。

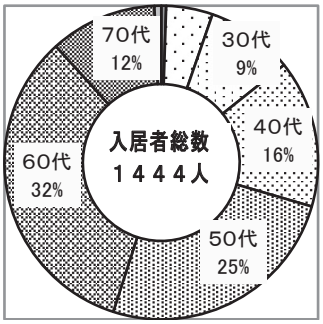
「今、子どもが５歳と３歳と４ヵ月です。ここに来ると、子どもたちは好きなことができるし、他のお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒になって遊べるので、とても楽しんでいます。夏場の日中に外に出かけるのは大変ですが、子どもたちと一緒にここに来ることで、私も気分転換にもなるので、とても助かっています」



――ありがとうございました。

抱樸館福岡の入居・退居などの状況

開所から２０２２年８月末までの入居者数



	人数	割合
10代	10	0.7%
20代	84	5.8%
30代	127	8.8%
40代	223	15.4%
50代	355	24.6%
60代	455	31.5%
70代	178	12.3%
80代	12	0.8%
計	1444	100%

２０２２年８月末現在の入居者

７１人（定員８１名）　男性７１名、女性０名

２０２２年７～８月の新入居者数・退居者数

新入居者数２７名　退居者数２５名

（注：８月末までの入居者数１，４４４名は、
２度・３度入居した人も１名と数えています。）

抱樸館北九州の入退居の状況は、特集の際にご案内します。

抱 樸 館 を 支 え る 会 の 概 要

抱樸館を支える会の目的

以下の事業・活動を目的としています。
◇ホームレス者支援事業
◇抱樸館に関する広報活動及び資金援助活動
◇これらに附帯又は関連する事業

設立年月日：抱樸館福岡が２０１０年５月に開設されるのにあわせて同年４月１０日に設立

正会員：以下の１８団体が正会員です。
グリーンコープの各単協（１５生協）
グリーンコープ連合会
ＮＰＯ法人 抱樸（旧：北九州ホームレス支援機構）
社会福祉法人グリーンコープ

賛助会員

２０２２年６月末の賛助会員は、以下の通り

グリーンコープの共同購入組合員	１０，７７０名
グリーンコープの店舗組合員・一般の方	１８１名
企業賛助会員	１０１社

その他（抱樸館の所在地）

抱樸館福岡（福岡市東区）	２０１０年　５月開所
抱樸館北九州（北九州市八幡東区）	２０１３年　９月開所
抱樸館下関：新たに開設を準備中	
抱樸館熊本（熊本市中央区）	２０１８年１２月開所

抱樸館福岡の見学のご案内（現在、中止中）

・抱樸館福岡を身近に感じていただき、ホームレス問題を深く知っていただくために、広く見学を募ってきました。多くの方が見学に訪れてくださり感謝申し上げます。
・大変残念なことですが、現在コロナ禍のため、入居者の健康を最優先し、見学を中止しています。
・状況が変わりましたら、会報やホームページ等でご案内を再開させていただく予定です。ご了承下さい。

抱樸館を支える会　賛助会員と会費について

抱樸館を支える会　賛助会員募集

賛助会員を募集しています。
賛助会員には、会報をお届けします。

グリーンコープの共同購入組合員

賛助会員の申込には２つの方法があります。

①毎月２５０円の賛助会費を申し込みいただく
（年間で３０００円です）
毎月の商品代金と一緒に引き落としとなります。
共同購入申込書の**１３００**で申し込みください。

②１口１０００円の賛助会費を申し込みいただく
何口でも申し込み出来ます。
申し込みいただいた月の商品代金と一緒に一括して引き落としとなります。
共同購入申込書の**１２９９**で申し込みください。

賛助会員は一度申し込みいただくと毎年更新されますので新たに申し込みいただく必要はありません。（グリーンコープの共同購入組合員の場合）
①の賛助会員は毎月継続して２５０円請求させていただきます。②の会員は申し込みいただいた月に毎年一括して請求させていただきます。

一般の方、グリーンコープの店舗組合員

１口１０００円の賛助会費を何口でも申し込み出来ます。
郵便振替でお願いします。
郵便振替　01710-0-123003
一般社団法人　抱樸館を支える会

企業賛助会員　募集中です

企業賛助会員は、会費が１口１０，０００円です。出来れば３口（３０，０００円）以上でお願いします。申し込みは、下記へ。

「抱樸館を支える会」事務局
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前１丁目５番１号
社会福祉法人グリーンコープ内
電話 092-482-1964

抱樸館の連絡先

抱樸館福岡　（電話 092-624-7771　FAX 092-624-7772）
〒813-0034　福岡市東区多の津５丁目５－８
抱樸館北九州（電話 093-883-7708　FAX 093-883-7705）
〒805-0027　北九州市八幡東区東鉄町７－１１
抱樸館熊本（電話 096-245-7521　FAX 096-245-7522）
〒860-0811　熊本市中央区本荘